

初等部・中等部
学校説明会

▶ 関西

2018年 6月16日(土)
7月 7日(土)
8月 4日(土)
9月22日(土)
10月20日(土)
11月17日(土)

【初等部】

受付 9:30
説明会 10:00-
場所 神戸校

【中等部】

受付 13:30
説明会 14:00-
場所 神戸校

▶ 関東

2018年 6月24日(日)

【初・中等部】

受付 13:30
説明会 14:00-
場所 文京校

初等部・中等部
見学・体験会

【初等部】

2018年 6月20日(水)
6月27日(水)
7月 4日(水)
9月26日(水)
10月24日(水)

受付 9:15
オリエンテーション 9:30-10:00
見学・体験 10:00-11:20
場所 神戸校

【中等部】

2018年 7月 5日(木)
9月27日(木)
11月 1日(木)

受付 9:30
オリエンテーション 9:40-10:10
見学・体験 10:10-11:30
場所 神戸校

Vol.
008

BUNBU

関西国際学園 教育白書

Kansai International Academy
Education white paper



講演 建築家
安藤 忠雄氏
「自由に生きる」

対談 株式会社マネーパートナーズ代表取締役社長
奥山 泰全氏
「金融教育について」

関西国際学園 スポンサー企業一覧

株式会社
廣田康之事務所

豊かなコミュニティづくり
MORIS

Well Holdings
株式会社 ウェルホールディングス

f @KIAINJAPAN



t @KIAINJAPAN



wa @KIASCHOOL



入学(編入)に関してのご相談は、お気軽にお問合せください。

関西国際学園 初等部・中等部 TEL.078-882-6680

特別
講演

「自由に生きる」 豊かな人生を送るために必要なことは？

建築家 安藤 忠雄 氏

日本を代表する世界的建築家「安藤忠雄」氏を学園に迎え、自らの幼少時代から青春時代、そして現在を通して、これからの日本、これからの子ども達に豊かな人生を送るために必要な〈本物の価値観〉について語っていただきました。

安藤 忠雄 Tadao Ando
建築家
1941年 大阪生まれ。
世界各国を旅した後、独学で建築を学ぶ。
1969年 安藤忠雄建築研究所を設立。
イエール大学、コロンビア大学、ハーバード大学の客員教授を務める。
1997年 東京大学教授。
2003年 東京大学名誉教授。
作品に〈住吉の長屋〉〈セビリア万博日本政府館〉〈光の教会〉〈大阪府立近つ飛鳥博物館〉〈淡路夢舞台〉〈兵庫県立美術館〉〈フォートワース現代美術館〉など多数。
1979年 〈住吉の長屋〉で日本建築学会賞。
2002年 米国建築家協会(AIA)金メダルほか受賞歴多数。
2010年 文化勲章受章。
東京大学特別荣誉教授、21世紀座調特別顧問、東日本大震災復興構想会議議長代理、大阪府・大阪市特別顧問。



日本の青春

建築の仕事をはじめから50年。ずいふんと長い間、つくり続けてきました。

「なぜ建築家になったのか」とよく聞かれますが、私は、建築には無限の可能性が秘められていると思っています。ただ美しいものをつくるだけでなく、自然環境や歴史・風土など、あらゆることに配慮しなければなりません。何よりも、建築は社会と深く関わっています。私も、建築を通して、社会に何が出来るかを常に考えながら、仕事をしてきました。

今の社会に目を向けると、国際的にみても、この国はかつての元気を失ってしまっています。発展目覚ましいアジアの国々の中で、日本だけが変化に対応できていない状況が続いているように思います。

国内経済が改善されつつあると言われている現在も、一般国民がその実感を得るには至っていません。

この国が、再び復活する日は来るのか。先行きの見えない不安は、なかなか払拭されません。

そんな中、日本の国が掲げる一つの希望は、2020年の東京オリンピックです。政府はその開催に向け、国民を盛り上げていこうと奮起しています。

私をはじめ多くの人々にとって、強く印象に残っているオリンピックと言えば、やはり1964年の東京大会でしょう。当時の日本は活気に溢れていました。1945年の終戦からやっとのことで立ち上がり、社会がその青春を迎えようとする中で、満を持して開催された東京オリンピックは国民

の心を一つにし、大きな感動をもたらしました。しかしその圧倒的エネルギーは、時に参加する選手個人の人生をも大きく左右しました。

私の記憶に深く刻まれた選手に、マラソンランナーの円谷幸吉がいます。

円谷は、東京オリンピックの最終日を飾る男子マラソンで、ゴールの代々木競技場に二位で入場しました。ゴール直前で後続に追い抜かれ、結果は三位だったものの、デッドヒートの末の劇的な展開、その勝利と敗北のコントラストに、人々は息を飲み、理屈を超えた感動を味わいました。あの時代、日本は確実に「生きて」いました。

レース後、見事日の丸を掲げた円谷は一躍時代の英雄になります。しかし続くメキシコでのオリンピックに際し、『今度こそ金メダルを』という総国民の期待を背負う重圧に耐え切れず、1968年1月、円谷は自決します。

死後、新聞紙上に毛筆で書かれた遺書が掲載されました。そこには自身を育ててくれた父母、兄弟、家族への感謝の言葉が、かみしめるように繰り返し綴られ、最後は謝罪の言葉で結ばれていました。真実の言葉の重さに、誰もが心を痛めました。文豪・川端康成をして「これ以上の文章はない」といわしめたこの円谷の手紙には、家族や命といったものに対する深い愛情と、礼儀が込められており、美しさすら感じられます。そしてその〈死〉は、何よりも深く人々に〈生〉を考えさせました。

あれから半世紀、高度経済成長からバブル崩壊を経て、日本の社会とその国民性はすっかり

様変わりをしてしまいました。現在、親が子を虐待したり、子が親を殺したりといった凄惨な事件が日常茶飯事となっていますが、これは日本人という民族から「礼」の心が失われていることの証拠にほかなりません。私たちは、円谷の一生を、あの時の感動を、今一度見直すべきだと思います。

日本中が沸き立ったあの1964年のオリンピックの興奮と感動をもう一度呼び起こしたいという思いは、多くの人々が共有しているのではないかと思います。当時と今では、時代背景も全く違い

ます。60年代がその青春期だったとすれば、今や日本の国は高齢期を迎えているという見方もあります。しかし青春とは、人間が目標を持って生きている時間のことを言い、60代、70代でも青春を過ごしている人間もいれば、20代で失う人もいます。

日本は今、国として確固たる目標を見失っています。

我々はいくつになっても常に目的を定めて青春を生き続けなければなりません。その為の原動力は、感動する心にあります。



絵本美術館(福島県いわき市 2004年)



The Japanese springtime of life

日本の社会が抱える最も深刻な問題は少子高齢化です。しかし、少子高齢化自体は、他の多くの先進国に共通して言えることです。

日本にとって本当に問題なのは、老人に対して子どもの比率が少ないことだけではなく、その少ない子どもに元気が無いことだと、私は考えます。そのほとんどが責任感ある自立した人間に育っていない。少子だけに親達が過保護になっているという事実が、事態をさらに悪化させています。

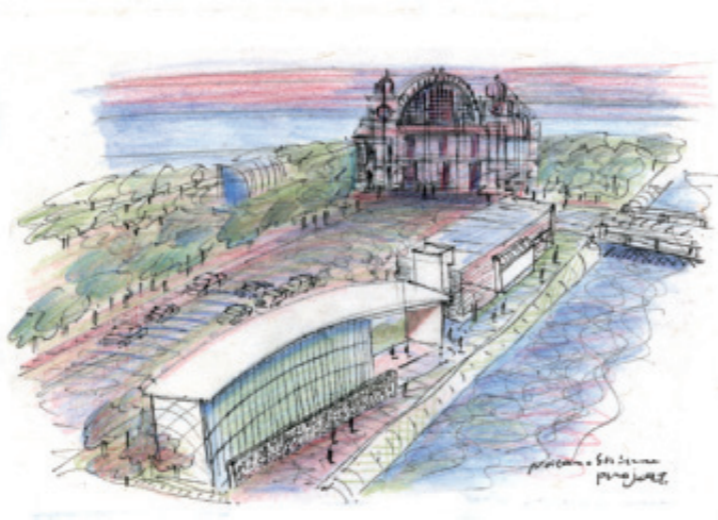
今の子どもたちは、幼稚園から小中高とひたすらに習い事や学習塾に通わされ、人格を形成する上で最も大切な時期に、遊ぶこともできません。本来人は、その子ども時代に友達と遊び、野原を走り回り、小動物と触れ合いながら、ものや命に対する愛情を培い、生きていく上で大切なことを自然と学んでいくものです。子どもの時に子どもらしいことをするのは、実はとても重要なことだと思ふのです。

私は、大阪生まれで、典型的な大阪の下町で育ちました。人々は貧しいながらも支えあって生活し、まち全体が生命力に溢れていました。そんな環境ですから、家の本棚には哲学や文学の本など皆無で、もちろんモーツァルトや、ベートーベンの音楽とも全く無縁、およそ文化的というには程遠い子ども時代を送ってきました。

思えばあの頃、社会はまだ敗戦の傷から抜け出せずにいましたが、子どもたちの眼は今より輝いていたように思います。私も毎日野原を走り回り、日が暮れるまで遊びました。放課後はほと

んど自由時間。勉強は学校でしかせず、教科書類は全て学校に置いたまま。宿題も学校で済ませ、校舎を出たら全力で遊ぶ。年の離れた子どもたちとの交流や、自然環境の中から、命に対する愛情など、生きていく上で最も大切なことを学びましたが、おかげで、小学校、中学校では常に成績が悪く、下から2番目をキープしていました。毎日朝起きたらまず、今日は何をして遊ぶかと考えました。友人を集めて野球しよう、魚釣りに行こう、柿をとりに行こうなどと、様々なことに挑戦して目一杯遊びながら毎日を過ごしていました。

現在と比べると、当時は何もありませんでした。それでも何とか毎日を楽しもうと、子どもなりに工夫を凝らして遊び方を考えました。その時の経験が、仕事でも大変役に立ったし、私を支えてくれもしました。どんな状況においても、希望は光をもたらしてくれる。あの頃から私は、暗闇の中にもなんとか光を見つけながら、走り続けてここまでやってきたように思います。



こども本の森 中之島(ドローイング)

一つだけ後悔しているのは、そんな環境で育ったため、いわゆる文化的素養を育む機会が全く無かったことです。

建築の道を進もうと考えた10代の終わりころ、まずはどのようなことを勉強すべきかと、関西近郊の大学をのぞきに行ったのですが、授業内容が全然わからない。文化的知識量が全く足りていなかったからです。同世代で同じく建築を志す友人たちと話をすると、幼少のころから古典音楽を聴き、小・中・高で森鷗外や夏目漱石をはじめとした文学作品に触れている人が多いことに驚きました。急いで本を読みはじめましたが既に手遅れの状態で、長年文化的な生活に慣れ親しんできた人たちには追い付きようもない。彼らは本当に豊かな子ども時代を送ったのだなとつくづく羨ましく思いました。

結局私は、建築の専門教育も受けず、大学にも行かずに、独学でこの道に足を踏み入れ、仕事をする中で多くを学んできました。幸いにして建築は、社会のいたる所に見本があります。若いころは関西に住んでいる利点を活かして、東大寺や唐招提寺に足繁く通い、徹底して観察し、空間を体験することで、日本的な美意識や建築のエッセンスといったものを、体感を通して学びました。土日はひたすら建築を見て歩き、スケッチをしながら、つくり手の意図や発想に思いを巡らせ、これからの建築のあり方について深く考え続けました。繰り返しているうちに、建築の世界は本当に面白いと思うようになったのです。

一方で、周りの人たちに少しでも追いつこうと、



必死で本を読み始めます。幸田露伴の「五重塔」、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」や、和辻哲郎の「古寺巡礼」など、建築を学んでいく中でも、優れた文学との様々な出会いがありました。即物的で、現実的である建築と、文学とは根本的に違う世界ですが、文学の世界を通してこそ見えてくる建築の奥行きがあります。今も新幹線での移動中や、就寝前には必ず本を読んでいます。読書は、その場に居ながらにして、様々な世界への「心の旅」を可能にし、想像力を刺激してくれます。

今、子どもたちの活字離れが問題となっています。次の世代を担う子どもたちには、出来るだけ多くの本を読んでほしいと思います。私は今、大阪の中之島に、彼らが自由に利用できて、絵本や児童本をはじめとした様々な文化に触れることのできる施設をつくろうと、大阪市と計画を進めています。読書を通して、他人や命に対する愛情、深い思考力を培い、奥行きのある人間になって欲しい。もともと日本人の多くは、社会に出ると本を読みません。しかし本は心の栄養であり、人生を真の意味で豊かにしてくれます。次の時代を切り開いていくためにも、本物の価値観を持った若者が一人でも多く育ってくれることを期待しています。

安藤 忠雄

奥山 泰全氏 株式会社マネーパートナーズ 代表取締役社長 × 中村 久美子 関西国際学園 学園長

特別
対談

“絶対にやり抜く” その気持ちがすごく大事

学生時代からビジネスや投資をスタート。
 投資家でありながらコンピュータや会計が分かることから声が掛かり
 日本で初めて個人投資家向けの日経平均オンライン取引システムを創造。
 また、為替手数料をゼロにすることで傾いていた金融セクターを
 V字回復させた後、その会社を任せられ東証一部に上場へ。
 そんな金融の超一流のプロである奥山泰全氏に、
 これからの時代や金融教育について、ざっくばらんに語っていただきました。

奥山 泰全 Taizen Okuyama
 株式会社マネーパートナーズ 代表取締役社長
 1971年 三重県津市生まれ
 慶応義塾大学商学部卒
 株式会社マネーパートナーズグループ代表取締役兼任
 外国為替証拠金取引(FX)をビジネスの基盤とし、個人
 投資家へのサービスの提供および他金融機関への自社
 システム提供やASPビジネスを展開

絶対に東京の大学へ行く その一心で頑張りました

中村 奥山さんは若くして東証一部上場企業の代表になられてますが、どのような家庭で育てられたのですか。

奥山 僕は、三重県の田舎にあるしがない作業服屋の息子です。

今こうして金融機関の経営者になっていますが「おまえは作業服屋の息子や。汗水たらして働いている人を馬鹿にしたらあかん」と幼い頃から言われて育ちました。

お店自体は建設現場の方たち向けのブティックのようなもので、小学校1年生くらいから店番をさせられました。親方さんをリーダーに、現場で働く若手たちはヤンキーに近い。だから恐いんですよ。そんな大人たちが、軍手やズボンをツケにしておいてと持っていく。

「アカン、泥棒だ」と思って、小さいながらもその方たちの足をつかんで、「お母ちゃん、ドロボーや！」と叫んだのです。すると母親が出てきて「〇〇建設さん、いつもお世話になっています」と挨拶している。それで「よく言っておきますから」とツケの意味がわからず、怒られました。

世の中の商取引は信用で動いているのだと、小学校1年生の時に理解させられました(笑)。

中村 中学・高校時代は三重県で過ごされたのですか？

奥山 高校まで三重にいました。僕は勉強が得意ではなく、勉強のできない人たちが集まる高校のなかでも、成績は下から数えた方が早かったですね。進学校ではないので大学へ行かない人ばかり。大学に進学する人も、近隣の大学や遠くて

せいぜい愛知県の大学で、東京の大学へ進学すると「すごい！」と言われる高校でした。

東京の大学へ行くのは学年で3~4人くらいだったでしょうか。

中村 そこから、奥山さんは慶應大学に進まれたのですよね？

奥山 高3の春、面談で先生に「実家が作業服屋さんだから跡を継げばいい」と言われました。「大学へ行きたい」と言ったのですが、当時偏差値が27で「100%無理だ」と鼻で笑われました。

そこから、絶対に東京へ行くんだ！と一念発起して死ぬ思いで勉強しました。

1年浪人しましたが、その間1日22時間勉強しました。誰にも信じてもらえないのですが…。

中村 2年間もそれを続けられたというのは、すごいですね。

奥山 絶対に東京へ行く、その一心です。

浪人する前に偏差値は50を超えており、僕にすると奇跡ですよ。浪人が終わる頃には偏差値85になっていました。

早稲田大学、東大の文Ⅱにも合格しましたが、福沢諭吉に憧れて慶應大学に決めました。



どんな環境にいても、 そこから何を学ぶかは自分次第

奥山 苦勞して大学に入ったのですが、大学は思っていた世界とは全く違いました。幼稚舎や普通部などからあがってくる富裕層の皆さんが大部分を占めており、受験でようやく這い上がってきた人間とのギャップがすごい。

鉄鋼から食品、通信、芸能、さまざまなご息がいて、ある意味、先を約束されている選ばれし者たちが周りにたくさんいました。大学1年生の時、そのような友達に恵まれたので、自分がいかに何も持っていないかを否応なく認識させられました。彼らは何年かどこかの会社に勤めた後、親父さんの会社に戻って30歳になるまでに取締役になる。ある程度のルールを約束されているんですよ。自分が慶應を卒業して一流企業に勤めても「絶対に彼らに追いつけない」と先が見えたというか…。

中村 苦勞して大学に入ったのに、現実とのギャップがあったのですね。でも、富裕層の方たちの中にも、意外と将来のルールがない人もいるでしょう？ 誕生日にフェラーリを買ってもらえる家庭の人はいいんでしょうけど、企業のサラリーマンが子どもを慶應幼稚舎から慶應大学に入れるというのはどうなんだろうか？と私は思います。

奥山 小学校から慶應に入れると将来が約束されると思うのは幻想です。上場企業に行ってもつまらない仕事をしている人はいっぱいいる。そんな将来のために、大事な息子や娘を幼稚園や小学校から受験させるのは、何か違うんじゃないかと僕は思います。

安定するから子どもを国家公務員にさせたいという親御さんもいらっしゃって、それを否定はしませんが「一度きりの人生、それでいいのか。もっと社会で自分がやりたいことを探せばいいんじゃないか」と思います。

中村 時代も変わってきていますし、私は学園の子どもたちには、やりたいことにチャレンジしてほしいと思います。

奥山 僕は大学1年生の秋に会社をつくり、大学のサークルジャンパーを販売していました。バイトより稼げるので、慶應の仲間や予備校の仲間に声をかけているうちに東京の大学のサークルジャンパーシェア85%という総元締めになっていました(笑)。取り扱うサークル数が1500、2万人のネットワークです。それを武器に「学生向けに仕事があればください」「ビジネスを教えてください」といろんな経営者の方に会いに行きました。

中村 すごい。大学を商売の場所に変えたんですか？

奥山 勉強はしていましたよ。友達もできたし！「僕は何も持っていない」と腐ってしまったら終わりですが、彼らは「僕は何で何も持っていないんだろう、持つためにはどうしたらいいんだろう」と考えるいい引き金を引いてくれたんだと思っています。

これから10年先、20年先 世の中が今と同じわけがない

中村 今、小学生くらいの子どもたちが大学を卒業後、70%は今ある職業とまったく違う職種に就くだろうと言われています。今の子どもたちは、ここから先、職がない。全く違うことを考えなくては、生きていけない時代になるそうですが、奥山さんは10年後、20年後の社会はどのようになっていると思われませんか？

奥山 AIやフィンテックなど新しい言葉を耳にすることが増えました。世の中の価値変動は絶えず起こっているんですよ。例えば、昭和初期には時計の卸問屋さんがありました。今、日本国内には時計の卸問屋はゼロです。

タクシーの運転席の隣は助手席と言いますが、昔は着物を着てタクシー(ハイヤー)に乗る人が多かった。女性の着物の裾をたくし上げて乗車の手助けをする必要がありました。タクシーにはそのサポートをする助手を隣に乗せていなければならなかったのです。そのため助手席と呼ばれているんですよ。今は一人で運転をするのが当たり前だと考えると、1台のタクシーに必要な人数は半分になってしまったんですね。同じようにIT化が進むにつれ、業務系の処理や管理職など人間が関わらなくてはいけない部分や作業が変わってきています。

中村 確かに、昔の人から見ると「どうしてそんな世の中になっているの？」と思うことはいっぱいあるでしょうね。

奥山 今、この瞬間を生きている僕たちは当たり前だと思っていますが…、これから10年先、20年先、今の子どもたちが社会に出たり、子どもを持つ時代に、世の中が今のままのわけがない。ゆっくり

としか変わっていかないの、その刹那刹那をその時を生きている人間には分からないですが、少し長期的に見ると世の中は目まぐるしく変わっているのです。ウィキペディアができるまではどうやって調べ物をしていたのでしょうか。

今、たくさんの人がLINEでメッセージを送っていますが、あんなに頻繁に電話をしていませんでしたよね。今は当たり前でも、10年前はそうではなかった。15年遡るとポケットベルの時代ですからね！

中村 何年先かわかりませんが、自動運転が当たり前になる時代ですものね。

奥山 自動運転もステージがありますが、完全自動運転まで10年でしょうか。20年経ったら全ての自動車が自動になっていますよ。自動車だけではなく、僕の自宅はフローリングで、妻は一日中、ぞうきんがけロボットを走らせています。今はぞうきんがけも窓掃除もロボットがする時代です。



中村 金融関係で言うと、銀行もAIが進んできましたね。

奥山 某大手銀行が何十年か先に雇用を維持することができなくなるからという理由で、窓口(テラー)の採用を今年から取りやめるそうです。また、今はATMが主流ですが、離島や地方に行くとATMがなかなかない。それなら、現金を引き出すのにスマホやネットで済ませてしまおうという話が出ています。自動運転よりは時間がかかる気はしますが、銀行の窓口から人がいなくなるのはもちろん、ATMさえなくなる方向に進むのではないのでしょうか。

中村 奥山さんは日本仮想通貨事業者協会の会長もされていますが、ビットコインのような仮想通貨についてはどのようなお考えをお持ちですか？

奥山 20世紀の最後にインターネット革命が起こり、インターネットが普及して10年～15年は「ネット上に個人情報やお金のデータを置いておくのは怖い」と言われました。個人のパソコンの中に写真などのデータを置いていたり、企業が重要なお客さまデータを会社のサーバのなかに置いておくと、パソコンやサーバが壊れてデータがなくなる可能性がありますよね。

それをインターネット上に置いておけばなくなりません。データにカギをかけて閉じ込めておいて、カギを持っている人にしか扱えない時代になれば、カギが掛かっているものの中にあるものが1円の価値なのか、1億円の価値なのかはカギがある人にしか分かりません。暗号化のノウハウは必要ですが、データをインターネット上に置いておくのが当たり前という時代に変わ

ろうとしています。

IoTなど世の中が便利になるには、データがインターネット上にあり、どこからでもアクセスできる必要があるんですね。

データをネット上に置くことが当たり前になると、それを管理する仕事をしてくれる人間が必要ですし、その人たちに支払う報酬はそのネットワーク上で流通する通貨、つまり仮想通貨で払うことになります。もちろん、その通貨が現実社会で法定通貨(ドル、円、ユーロなど)に換金することができて初めて仮想通貨の価値が出てくるのですが、そう考えると、仮想通貨はネットワーク社会をつくりあげるための一種の燃料と捉えた方がわかりやすい。ネットワークを維持するための石炭・石油のようなものです。仮想通貨はこれからの社会に絶対に必要とされるものだし、世間にも分かってもらわなくてはならない。ビットコインがどうなるかはともかく、仮想通貨というものはなくなるし、間違いなく流通・普及します。



個人投資家のはずが、
出会いが重なり今の会社を上場へ

中村 少し話が戻りますが、奥山さんは大学時代からビジネスをされていたそうですが、投資の世界に入られたのはいつですか？

奥山 同じ大学1年生の時に、バブル崩壊直後でした。自分のお年玉やバイト代などなけなしの150万円で始めました。失うわけにいかないお金なので相当本気を出して、自分でプログラムまで組んでテクニカル分析をし、投資したのですが、ものの3ヶ月で50万円になりました。最初のディールは大失敗です。その後、大学でマーケティングを勉強し、投資の神さまのような人に弟子入りして投資を学びました。

結局分かったことは、どこで売ったり買ったりするかが大事なのではなく、管理の仕方、お金の勘定

の仕方が大事だということでした。

資産が100万円の人と1億円の人なら、使っているお金やなくしていいお金が違います。自分の現有リソースがこれだけで、どこまで、どういう風に動かすかをイメージできるか、資金管理をできるかが投資には重要なスキルなんですね。

中村 投資家として、どのくらい成功されたのですか？

奥山 1990年に50万円に減った資金が、2002年に証券会社の取締役に着任する直前で、投資だけで5億3000万円になっていました。2000年頃に為替取引をインターネットサービスとして始めるために、コンピュータが使える、なおかつ投資と会計が分かる人ということで声がかかりました。

当時のシステムは酷くて、ログインするたびにお客さまの残高が違っていたり、1日に2~3回システムダウンするような状態でした。その為替の取引システムを直す(リバースエンジニアリング)プロジェクトを立ち上げ、満身に動くようにしました。今では当たり前ですが、2002年3月に、日本で初めて日経平均のインターネット取引が個人投資家さん向けにお披露目されたのです。その後、現在の会社であるマネーパートナーズに出会いました。もともとは大手EC企業の金融セクターでしたが、業績が厳しくコンサルタントとして手伝えることになりました。当時、為替業界は手数料が当たり前にかかっていたのですが、広告を全部止めて、その分をお客さまに還元しようと

為替業界で初めて、手数料をゼロにしました。ネット掲示板で「神対応だ」と取り上げられ、業績は1ヶ月でV字回復。「もういいだろう」と個人投資家に戻ろうと思った頃、会社を上場させて欲しいと頼まれ、2006年8月に社長になりました。2007年6月21日、社長就任後10ヶ月で現在のJASDAQへ上場。2012年に東証2部、2013年に東証1部上場。ライブドアショック以降、初めて東証1部に上場した金融機関です。

中村 個人投資家に戻りたいと思いながら、請われてシステムをつくったり、コンサルタントをして働かれているうちに、今の会社にたどり着き、東証1部にまで上場させたなんて、すごいですね。



お金は目的ではなく手段
それを知らないと豊かになれない

中村 そんな金融のプロである奥山さんに学園での金融教育をリードしてほしいとお願いしたのですが…、私が金融教育を導入したいと思ったきっかけは息子です。

お金のことは誰も教えてくれないから。

私は経営者の家族のなかで育ったので当たり前にお金のことを考えていました。

例えば、学生の時にデートで飲食店に行くと、席数が何席で客単価は〇〇円くらい。

何回転するのかお店の人に聞いて経営が厳しいだろうなと思ったりする。デートでそういうことを聞くと彼氏がびっくりして。

奥山 ははっ。僕も数えますよ。これを1個売ったらどれだけ利益があり、1日の売り上げはこれくらいで、何人働いているからお給料どれくらい

だろうという具合に(笑)。

中村 私はギャンブルをしたことはないのですが、経営をしているとお金に強くないといけない。でも、日本ではお金の授業はタブーです。

リーマンショックのときに知人が投資で失敗し、自殺してしまいました。

学園の生徒や卒業生に、そんな風になってほしくない。無知ではだめだと考えたんです。

でも、「FXトレードって知っていますか」「為替ってどうやって決まるか知っていますか」と学園の茶話会で問うと誰も知らないんです。

親はお金のことを教えられない…。

奥山 それで、FXなんて聞くと「危ないからやめておけ」と言うんですね。要するに知識(リテラシー)がないんだと思います。

中村 お金は一生ついて回るし、決して目的にしてはいけない。でもとても大事な手段だと思います。それを知らないときっと豊かになれない。

奥山 お金の管理の仕方や動かし方がわからないから、お金にこだわる。経済的に余裕があり、且つお金とは何かを本質的に理解して初めて「お金は所詮お金。世の中にはお金より大事なものがたくさんある」と言えると僕は考えています。

中村 負け惜しみで「お金なんて」というのは聞きたくないですし、誤解を恐れずに言うと「卒業生にはみんなお金持ちになってほしい。そのお金をどう使うか、その使い方までが教育なので、そこを教えたい」と思います。お金に強い子に育てて欲しいと、奥山さんに丸投げでお願いしたのですけど(笑)。

奥山 お金を使うことは当たり前でも、お金を稼ぐという意識がないまま社会人として過ごしている人が、今の世の中にはたくさんいます。どんな職業でも構わないけれど、自分の会社がどうやって社会とつながり、どういう風にお金を得ているのか、それがどう自分の給料になっているのかをイメージできるようになって欲しいですね。僕はお金に関わる仕事を25年続けています。お金に対する価値観やイメージ、取り扱い方を子どものうちから最小限でも意識付けたいと思います。自分が生きている環境を自分なりに数えることができるような、自分なりに価値観を持てるような見方・考え方を提供することは、子どもが将来、生き残っていくための重要なスキルの一つだと思います。



先行投資をし続けるからこそ
関西国際学園は魅力的でチャーミング

中村 私は18年かけて今の関西国際学園を創り上げてきたのですが、奥山さんは関西国際学園に対して、どのような印象をお持ちですか？

奥山 情熱や教えることに対するこだわり、自分たちがこんなことを子どもに残してあげたいというのがはっきり伝わってきます。それが、今の時代にぴったりマッチしていると思います。

世の中には、「関西国際学園は何を教えているの？」と思っている方もおられるかもしれませんが、自分たちで明確なカリキュラムをつくっていることはすごいことです。先を見据えたカリキュラムをつくれない学校がほとんどだと思いますよ。

中村 ありがとうございます。学園にも、よく学校法人の方も見学に来て下さるのですが、ここは株式会社だからできるんだというようなことをよく言われます。

奥山 そうなんですか。株式会社なんだから、思い切って上場しましょうよ。日本にはゼロですが、海外にはそういう事例があります。日本で初めて上場した学校って、カッコイイじゃないですか。



中村 スイスの学校を視察したときに、お会いしたある先生が「Education is business」という類のお話をされました。誤解をしないでいただきたいのですが、私も教育と経営のバランスはすごく難しいと感じています。ビジネスではあるけれども、子どもたちができるだけのことをしてあげたい、でもやりすぎると立ちゆかなくなる。やればやるほど大変だと実感しています。

奥山 確かにプログラミング教育一つを取っても、コンピュータープログラマーは平社員レベルで月給100万円くらいです。ある程度のクオリティの人を連れてくると、多分、学校の先生の給料では取まらないでしょう。でも、そのような教育を中村先生は提供してあげたいとっていらっしゃる。子どもたちに何か新しいことを教えてあげたいと思う度に、いつも先行投資をしていかななくてはならない。そのうえ、今の授業料でうまくカリキュラムを組んで授業を進めているのに、必要に迫られてもいないプログラミングやAI、金融教育と、「どうしてお金のかかることをするの」と言われてしまう。でも、これからの世の中、そういったことを教えてあげないと、子どもたちのためにならないという思いがあるから、中村先生の眼鏡に合った新しいテーマをカリキュラムにプラスしておられる…、それはある意味、投資ですね。

中村 そうです。ずっと投資をしてきたけれど、まだ子どもたちは、まだまだ成長過程です。やっとそれなりの形になってきたところです。今、子どもたちは英語を使うことができますが、将来世界がどうなるのかはわからない。プログラミングも世間が言う前から



必要だと思って取り入れましたし、フランス語や中国語も必須にするなど、新しいことへの取り組みがなかなか理解されないまま18年やってきました。金融教育も誰にも必要と言われていませんが…、ただ、金融教育の導入は保護者の皆さんに一番喜んでもらっています(笑)。

奥山 新しい教育を取り入れるための資金をどうするのかは問題ですね。先ほどの話にありましたが「Education is business」って賢い言葉だなと思います。拡大、再生産し続けられるサステナビリティを持てること自体が、その組織の力であり、成長性。クライアント(お客さまである保護者の方たち)も安心できると思います。

中村 4年前にスイスにある年間授業料1400万円の学校を見学したとき、「すごい！かなわない」と

思いました。でも2年前に行ったときに、同行したスタッフは「勝っているところがいっぱいありますよね」と言うんです。その2年の間に関西国際学園が成長していたのですよ。

奥山 僕は授業料を倍出してもいいから、先行投資をし続ける関西国際学園で子どもを学ばせたいですね。関西国際学園は先行投資をし続けるから価値がある、時代の先を行っているから子どもを預けよう、この学校に子どもを入学させたいという思いにつながると思います。

新しい価値観を見だし続けてきたからこそ、価値が認められてきたのではないのでしょうか。これから先も先行投資を続けるからこそ関西国際学園は魅力的であり、チャーミングであり続けると思います。